

<復習>

§ 1 問いと推論は、どう関係するのか？

・推論は問いを前提する。

・問答推論 $Q, \Gamma \vdash p$

$Q2, \Gamma \vdash Q1$

§ 2 推論的意味論とは何か？

・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流推論と下流推論を判別できることである。

§ 3 推論的意味論から問答推論的意味論へ

・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流問答推論と下流問答推論を判別できることである。

§ 4 文の意味と発話のコミットメント

§ 5 焦点と二重問答関係

第 2 節 発話が焦点を持つとはどういうことか

少し復習しておこう。命題の意味を理解することは、第 1 章で見たように、よい上流問答推論とわるい上流問答推論を判別し、よい下流問答推論とわるい下流問答推論を判別する能力を持つことである。これに対して、現実に行われた発話を理解するとは、発話される命題を理解するだけではない。つまり上記の意味でよい上流問答推論と悪い問答推論を判別でき、よい下流問答推論と悪い下流問答推論を判別できるだけでなく、それが現実の文脈の中で発話される時の意味を理解することである。現実の推論は、前提から論理的に帰結する多くの命題から一つの命題を選択することによって可能になり、その選択は問いに答えることとして可能になるだろう。つまり現実の発話は現実の問いへの答えとして可能になり、現実の推論は問いに答えるプロセスとして可能になる。これは現実の上流問答推論である。命題は様々な焦点をとりうる可能性を持つだけであって、現実には焦点を持つことはない。それに対して、発話は焦点を持つが、その焦点位置は、発話が答えとなる相関質問によって決定する。第 2 節では、この焦点を詳しく説明する。

このように、発話の意味は、文の意味+現実的な上流推論だと言えるが、下流推論関係についてはどうだろうか。発話が行われる時点では、まだ現実的な下流推論はまだ成立していない。しかし、その下流推論は既に始まっているのである。話が錯綜しているので、結論を先取りしておけば、 $Q2 \rightarrow Q1 \rightarrow A1 \rightarrow A2$ という二重問答関係があり、発話 A1 の焦点の説明が課題になっているとしよう。A1 の焦点位置は、相関質問 Q1 によって決定する。そして Q1 は、Q2 に答えるために設定されたものである。つまり Q1 の答え A1 は、Q2 の答えを見つけるための推論（これは A1 の下流推論となる）の前提となる。Q2 を問う者が、A1 のある箇所に注目するのは、Q2 の答えを見つける手がかりになるからである。したがって、A1 からの下流推論がどのようなものになるかは、A1 の焦点位置がすでに示しているのである。

つまり A1 の焦点へのコミットメントは、Q1 だけでなく、 $\langle Q2 \rightarrow Q1 \rightarrow A1 \rightarrow A2 \rangle$ という二重問答関係の中で理解可能になるのである。その意味で、焦点を持つ発話の意味を理解することは、 \langle 文の意味を理解すること + 現実的上流問答推論 + 現実的な下流問答推論を理解すること \rangle だと言えるだろう。

この節の論旨は複雑なので、全体の流れを説明しておきたい。

1 では焦点とは何かを説明する。2 では、焦点が異なる発話は、意味が異なると考えたい理由を述べる。3 では、それにもかかわらず、フレーゲは、焦点の違いは命題の意味の違いではない、と考えることを説明する。4 では、フレーゲの言うように焦点位置の変化は、命題の意味を変えないかもしれないが、その命題を証明する方法が変わること、つまりその命題の現実的な上流推論が変わることを説明する。5 では、焦点の違いは、当の発話の下流推論の違いを生み出すことを説明する。したがって、焦点の違う発話は、命題の真理条件は同じであったとしても、発話の意味はこととなる。つまり、命題へのコミットの仕方は異なることを示す。この節では、発話が焦点をもつとはどういうことかを、（最終的に第 2 節の 5 で）二重問答関係を用いて説明する。

1 焦点とは何か

文は、一語文を除くと、普通は多くの語から出来ている。文を構成する多くの語の連結関係は、統語論的 (syntagmatic) 関係と呼ばれる。例えば、英語の SVC とか SVOC というような関係である。他方で、文を構成する文末表現は、それぞれ同種の類似の表現との関係の中で意味をもつ。例えば、色を表す様々な語「赤」「青」「黄色」「緑」などの関係である。この関係は、パラダイム的 (paradigmatic) と呼ばれる。私たちが、文を作るためにパラダイム的關係にある同種の多くの語の中から一つの語を選択するとき、私たちはそれを「他でもなくこれ」というような仕方を選択する。「S は P である」という文の場合に、S も P も「他でもなくこれ」という仕方を選択されている。しかし私たちは文を構成するすべての語についてこのような選択を同時に一気に行うことはできない。私たちは一つの語句の選択だけを行うことができる。なぜなら、文の他の要素を前提しなければ、ある語句の選択ができないからである。同一の文の発話は、異なる複数の焦点をもちうるが、一つの発話は一つの焦点しか、持ちえない。このことは、命題論理学において主結合子が一つになることに似ている。またこれはゲシュタルトの知覚における地と図の構造に似ている。たとえば、有名なウサギとアヒルの反転図形の場合、私たちはそれをウサギとして見ると同時にアヒルとして見ることは出来ない。焦点の場合もこれと同様である。例えば「リンゴが赤い」という言明の場合に、「(桃でも、オレンジでも、ナシでもなく、他でもなく) リンゴが、赤い」というように「リンゴ」に焦点をおいて理解することも出来るし、また「リンゴは、(青でもなく、黄色でもなく、緑でもなく、他でもなく) 赤い」というように「赤い」に焦点をおいて理解することも出来る。しかし私たちはこれらの二箇所と同時に焦点をおいてその発話を理解することはできない。

ちなみに、新情報と既知情報の区別は、焦点がおかれる表現とその他の表現の区別に、おおそ対応しているが、完全に対応するわけではない。なぜなら、すべての発話は、焦点と前提の区別を持つが、すべての発話が新情報と旧情報の区別をもつとは限らないからである。たとえば、再度の確認のために「では、(他でもなく) 明日お会いしましょう」と発話する場合、「明日」に焦点があるが、これは新情報ではない。では、ある箇所に焦点が置かれるとはどういうことか、あるいはそもそも発話が焦点を持つとはどういうことだろうか。

2 関連質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する。

(1) 関連質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する。

「誰かが今までに作ったすべての言明は、ある問いに答える中でつくられたのである。」
(Collingwood 1939, p.23) コリングウッドが指摘したように多くの場合、発話の意味は、関連質問との関係において明確になる。私たちは、同一の命題を異なる質問に対する答えとして使用できる。答えの焦点は、関連質問である補足疑問の疑問詞のところに代入された語句にある。従って、関連質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する。次がその例になる。(以下、焦点の地位を、主に[...]_Fで表記する。)

Q1: 文学部は、[OA 入試をする]_Fのですか？

A1: 文学部は、[OA 入試をします]_F。

Q2: 文学部は、OA 入試を[しない]_Fのですか？

A2: 文学部は、OA 入試を[します]_F。

Q3: [文学部が]_F、OA 入試をするのですか？

A3: [文学部が]_F、OA 入試をします。

Q4: [どの学部が]_F、OA 入試をするのですか？

A4: [文学部が]_F、OA 入試をします。

これは、主張型発話を答えとする質問の場合に限らない。命令や依頼のような行為指示型発話の焦点もまたそれを答えとして要求する問との関係において明らかになる。

Q5: [どれを]_F片付けましょうか？

A5: [これを]_F片付けてください。

Q6: これを[どう]_Fしましょうか？

A6: これを[片付けて]_Fください。

私たちは、行為拘束型や表現型や宣言型の発話についても例をあげることができるだろう。

このように関連質問との関係によって返答の発話の焦点位置は決定するが、逆に、発話の焦点位置が与えられれば、その関連質問を推定できるだろう。関連質問が明示されていない発話に関しても、その焦点位置に注目することによって、暗黙的な関連質問を推定することが可能になる。

(2) 補足疑問の問答と同一性言明

(i) 補足疑問は指示を求めている。

補足疑問は、答えを求めている。答えとは、補足疑問文の疑問詞に、ある表現を代入して、(必要に応じて位置を変えて)平叙文としたものである。(ただし、多くの場合、私たちはそのような答え方をせず、疑問詞に代入することになる文末満表現だけを発話して答える。つまり、完全な平叙文ではなくて、その部分だけを発話する。なぜなら、その部分こそが問う者が求めている新情報であり、その他の部分は、すでに補足疑問発話によって与えられている旧情報だからである。)

補足疑問は、他者に尋ねるときと、自問するとき用いられるが、どちらにせよ、補足疑問発話を理解するとは、それによってどのような対象が求められているのかを理解することである。他者に尋ねるとき補足疑問発話は、他者に対象の指示を求めている。これへの返答を他者に伝えるときには、他者に対象を指示している。あるいは他者が対象を見出すための手がかりを与えようとしている。自問するとき補足疑問発話は自分で対象を探求しており、これへの返答を自分で見出すとき、対象を見つけている。

補足疑問文の疑問詞を除いた部分は、フレーズのいう述語の不飽和によく似た性質をもっており、それを飽和させるために指示を求めている。違いは、述語はそれだけでは完全な文となることがないのに対して、補足疑問文の疑問詞を除いた部分は、それだけでも完全な文となることが可能な場合があるということである。例えば、「あなたは何を買いましたか」の「何を」の部分を除き、疑問を示す「か」を除いて、「あなたは買いました」とすると、目的語が欠けており、完全な文とはならない。しかし、例えば、「あなたが、その本を買ったのはいつですか」の場合には、「いつ」の部分を除き、疑問を示す「か」を除いて、「あなたは、その本を買った」としても文としては完全である。

(ii) 問い求められるものの記述句と答えは、同一対象についての異なる表現である。

補足疑問を問われた者が、返答できるためには、補足疑問は返答者がどの対象を指示すべきかを指示しているはずである。なぜなら、そうでなければ、返答することが出来ないからである。自問自答の場合にも、問いは答えが何を指示すべきかを示しているはずである、さもなければ、答えを求めるとき、何を求めたらよいのかわからないからである。つまり、補足疑問は対象の指示を求めているのだが、しかしその対象を返答とは異なる他の仕方ですでに示しているはずである。したがって、補足疑問と返答は、異なる仕方ですべて同一対象を指示しているはずである。次の例で確認しよう。

「世界でもっとも走るのが速い人はだれですか」「ボルトです」
「あなたはどこの出身ですか」「ヨーグルトで有名な国です」
「あの地震が起きたのはいつでしたか」「10年前の明日です」

これらの補足疑問と返答は同一の対象の異なる指示を与えており、それは次の同一性文によって明示できる。

「世界でもっとも走るのが速い人＝ボルト」
「問いの受け手の出身場所＝ヨーグルトで有名な国」
「あの地震がおきた時点＝10年前の明日」

補足疑問を発する者が意図していることは、彼が求めている対象を指示する別の表現を求めることではなく、対象そのものに辿りつくことであろう。返答者がたまたま言葉で返答するとき、問う者が、その対象に辿りつくのを助けるための手がかりを言葉で与えているにすぎない。場合によっては、指しなどの別の方法で答えることができるかもしれない。問う者の注意も答える者の注意も、言葉には向かっておらず対象に向かっている。しかし第三者から見れば、そこに生じていることは、同一性文を共同で作ることである。

(iii) 答えの完全文と同一性文

上述のように補足疑問に対する答えは、多くの場合、問いの繰り返しをさけた最も短い形式において、対象の指示を与えている。例えば、次のようになる。

「昨夜は何を食べました？」「カレー」

このような省略された答えを補って、文法的にも情報内容としても完全な形で表現することができる。それを「答えの完全文」と呼ぶことにしよう。上記の例では、次のようになるだろう。

①「私は昨夜、カレーを食べました」

補足疑問に対する答えの完全文は、同一性文に書き換えることができる。上の例は、次のような同一性文に書き換えられる。

②「私が昨夜食べたもの＝カレー」

上記の①は、別の問いの答えにもなりうる。例えば次のようである。

「あなたがカレーを食べたのは、いつですか」

しかしこの問いに対する答えとしての①を同一性文にしたものは、②ではなく、次の③になる。

「私がカレーを食べた時＝昨夜」

この同一の文の二つの言明の違いは、次の焦点の違いになっている。

①[^]「私は昨夜、[カレー]_Fを食べました」

②[^]「私は[昨夜]_F、カレーを食べました」

この焦点の違いは、それぞれの答えの完全文を同一性言明に書き換えた時に、さらに明瞭になる。

①^{^^}「私が昨夜食べたもの＝カレー」

②^{^^}「私が最後にカレーを食べた時＝昨夜」

①と②は同じ文であるが、別の問いへの答えの完全文であった。実際の答えは、文の発話、つまり言明である。文としては、同じ完全文であっても、問いが異なれば、言明としては異なる。それは焦点の違いであり、その焦点の違いをさらに明確に表現すれば、その完全文を同一性文に変換した時の、同一性文の違いとなる。

以上をまとめると次のようになる。

「昨夜は何を食べました？」

文未満返答:「カレー」

①完全文返答:「私は昨夜、[カレー]_Fを食べました」

完全文返答の同一性文:「私が昨夜食べたもの＝カレー」

「あなたがカレーを食べたのは、いつですか」

文未満返答:「昨夜です」

②完全文返答:「私は[昨夜]_F、カレーを食べました」

完全文返答の同一性文:「私が最後にカレーを食べた時＝昨夜」

①と②は同じ文であるが、別の問いへの答えの完全文であった。実際の答えは、文の発話、つまり言明である。文としては、同じ完全文であっても、問いが異なれば、言明としては異なる。それは焦点の違いであり、その焦点の違いをさらに明確に表現すれば、その完全文を同一性文に変換した時の、同一性文の違いと

なる。ところで、ある問いに対するある答えの完全文は一つとは限らない。上記の例では、①も②も、「あなたは昨夜何を食べましたか」の答えの完全文である。

補足疑問の問いも、決定疑問の問いも含めて、(残念ながらすべてではないかもしれないが)多くの問いの答えの完全文は、上記のような同一性文に書き換えることができるだろう。主な疑問詞や決定疑問文を取りあげて、それを説明しよう。

(iv) いくつかの疑問詞についての説明

(a) 疑問詞「どれ」「だれ」を用いる問い

「あなたが好きな花は何ですか」と「あなたが好きな花はどれですか」を比較してみよう。例えば、花屋の店先で質問するときには、「あなたが好きな花はどれですか」という質問することが多いだろう。そのとき、答える者は、その花屋に並んでいる花の中から選んで答えることを期待されている。花屋の店先で、「あなたが好きな花は何ですか」と質問することもできるが、その時には、質問する者は、花屋の店にある花に限定することなく、好きな花を教えてくださいと尋ねており、返答者が、花屋にない花を答えても問題ない。しかし、「あなたが好きな花はどれですか」という問いは、花屋の店先で質問したり、花の図鑑を見ながら質問したりするときに、使われるだろう。つまり、選択肢が与えられているときに、私たちは「どれ」という疑問詞を使った質問を使用し、「何」の質問の場合には、答えの選択肢が与えられてないと想定できる。

さて、「どれ」の質問がこのような質問であれば、答えは、想定された選択肢の中から選択される。そして、答えの完全文は、次のような同一性文にすることができる。

「あなたはどの花が好きですか」「あれです」

「私の好きな花＝あれ」

「誰」の質問の場合、選択肢が与えられている場合と、与えられてない場合がある。「クラスの中であなたが好きなのは誰ですか」の場合には、選択肢が与えられている。しかし「あなたが尊敬するのは誰ですか」という質問の場合には、選択肢の集合が与えられているわけではない。しかし、死んだ人を含めるとしても、あるいはフィクションの中の人物を含めるとしても、とにかく人間の中から選択することが期待されていることは間違いない。選択肢の集合は、疑問詞のドメインの条件によって、与えられていると言ってもよいかもしれない。いずれにせよ「誰」の質問は、一人ないし複数の人間を指示することを求めているので、その答えの完全文は次のように同一性文に書き換えることができる。

「あなたが尊敬するのは誰ですか」「ガンジーです」

「私が尊敬する人物＝ガンジー」

(第1章第2節3の(5)の(b)で、「誰」や「いつ」や「どこ」は、ドメインの条件(人物、時刻、場所)を使いすれば、「どの人」「どの時刻」「どの場所」などで代用できると述べたが、「どれ」という疑問詞が、選択肢が与えられているという条件を暗黙的に持つのだとすると、そのことに注意して書き換えをおこなう必要がある)。

(b) 疑問詞「どこ」「いつ」を用いる問い

キャンプにゆく相談をしていて、「どこに行きたいですか」と問われたときを考えてみよう。もしこの問いが、特定の場所を尋ねているのならば、答えは「大山です」というようなものになり、その完全文は「私が行きたいところ＝大山」という同一性文に書き換えられるだろう。

もし「どこに行きたいですか」と問われて、「涼しいところに行きたいです」と答えたのだとすると、答えたものは、その問いが特定の場所を答えなくてもよい問いだと考えたのである。その場合、その問いをより正確に表現するならば、「あなたはどんなところに行きたいですか」「あなたが行きたいところの特徴はなにですか」という問いになるだろう。答えた者は、その問いをこのような意味で理解したのである。そのときには、答えの完全文は、「私が行きたいところの特徴＝涼しいこと」のような同一性文、つまり具体的な場所の共指示表現の同一性文ではなく、抽象的な性質の共指示表現の同一性文になるだろう。

「いつ」の問いの場合には、たとえその答えが、曖昧になるとしても、答えの完全文を、同一性文に書き換えることができるだろう。

「いつになったら引越すの?」「子供が大きくなったとき」

「引越すとき＝子供が大きくなったとき」

(v) 同一性言明を答えとすることが難しい補足疑問

「どれ」「だれ」「いつ」「どこ」については、答えが同一性言明になると言えるが、しかし、他の疑問詞については、困難であるかもしれない。

(a) 疑問詞「どのようにして」(how)を用いる補足疑問

「あなたはどのようにして試験に合格したのですか?」「毎日10時間以上勉強したのです」

この答えの完全文は、次のようになる。

「私は毎日十時間以上勉強してその試験に合格しました」

これを、次のような同一性文に書き換えられるかもしれない。

「私が試験に合格したやり方＝毎日10時間以上勉強すること」

この左右の名詞句は、抽象的一般名だといえるだろう。ただし、「私が試験に合格したやり方」の記述の仕方は複数ありうるだろう。それらが、同一対象についての異なる記述だといえれば、複数あってもそれらは、同一性文であるが、それらが同一対象についての異なる記述だといえるかどうか、曖昧である。

(b) 疑問詞「何」を用いる問い

「あなたの好きな花は何ですか」と問われて「バラです」と答えるとき、この答えの完全文「私の好きな花は、バラです」は、主語と述語を换位して「バラは、私の好きな花です」と言い換えられるので、同一性文である。しかし、「これは何ですか」と問われて、「それはリンゴです」と答える場合には、换位して「リンゴが、それです」と言い換えることはできない。つまり、これは主語述語文である。このように、「何」疑問への返答は、同一性文の場合と主語述語文の場合があるようにおもわれる。

「何」の問いの曖昧性

「何」疑問に対する答えが、主語述語文になるのは、その「何」の問いの曖昧性が原因であるかもしれない。例えば、「これは何ですか」という問いに対して、ある場合には、「それはリンゴです」が答えになりうる。しかし、この問いに対して答える仕方は、無数にある。同一の状況においても、「それは果物です」「それは

食べ物です」「それは私のお昼御飯です」「それは私がかったものです」「それはビタミン補給のものです」などが可能であるかもしれない。

そこで、上記のどれかで答えるとする、その時にはその問いを文脈から限定して答えている。例えば、「それは何ですか」を「その果物としての種類は何ですか」という問いだと理解して、「リンゴです」と答える。「それは何ですか」を「それをどうするつもりなのですか」という問いだと理解して「それは私のお昼ごはんです」と答える。「それは何ですか」を「それはどうしてここにあるのですか」という意味だと理解して、「それは私が買ったものです」と答える。

もし、「これは何ですか」という問いをこのように限定しなければ、この問いに答えることはできないだろう。「何」の問をこのように限定して答えているのだとすれば、例えば

「これは何ですか」「リンゴです」

という問答は、正確には次のような問答である。

「これはどんな種類の果物ですか?」「リンゴです」

この完全返答文は、次のようになり、それは次のようにな同一性文に書き換えられるだろう。

「その果物としての種類は、リンゴです」

「その果物としての種類＝リンゴ」

「何」の問いの限定の手がかり

「何」の問いを限定する方法としては、①問いの観点を加えること、②「何」以外の問いに言い換えること、などが考えられるが、どのような方法をとるにせよ、何を手掛かりにして、その問いを限定するのかが、問題になる。問われた者は、おそらく相手がどういう目的でそれを問うたのかを推測し、それによって、「何」の問いを限定するだろう。その時に重要なのは、「何」の問いを問う者にとってのより上位の問いである。なぜなら、より上位の問いに答えるために、「何」の問いを問うたはずだからである。<Q2→Q1(「何」の問い)→A1→A2>という二重問答関係がある時、Q2 のによって、Q1 の「何」の問いをより限定できる可能性がある。

もし答えの完全文がすべて同一性文になれば、問答関係は非常に明瞭になるだろう。なぜなら、ほとんど文は同一性文に書き換え

(c) 疑問詞「なぜ」を用いる補足疑問

多くの場合、これまで見てきたように問いの答えは、一つの文の発話、あるいはその部分の発話となる。これに対して、「なぜ」の問いは説明を求めるものである、その答えは、一つの文ではなくて、推論になる¹。たとえば、「なぜ P なのですか?」という問いは、P となる説明を求めており、その答えは、「S であり、T である。ゆえに、P となる」というような「P」を結論とする推論になる。

ところで、私たちは、「なぜ P なのですか?」という問いを、出来事の原因を問う「なぜ」、行為の理由を問う「なぜ」、主張の根拠を問う「なぜ」に区別できるだろう。それゆえに、「なぜ P なのか」という問いは、それぞ

¹ 「なぜ」質問が、推論による説明をもとめるものであることは、カール・ヘンペルが指摘したことであり、この指摘は正しいと思う。参照、カール・ヘンペル『科学的説明の諸問題』、第1章、第2章、(Hempel 1965)。問いの答えが、一つの文とはならないもう一つの事例は、「その人はその後どうなったのか」というような物語的問いであり、その答えは、物語形式をとり、一つの文になるとは限らない。

れ「Pの原因は何か」「Pの理由は何か」「Pの根拠は何か」という「何」という疑問詞を用いる問いに言い換えることができるように見えるかもしれない²。これらの言い換えられた問いに対しては、それぞれ「Pの原因は…である」「Pの理由は…である」「Pの根拠は…である」という同一性文で答えることができる。この「…」には、名詞や名詞句や名詞節が入るだろう。「原因(理由、根拠)は何か」というような問いは、Pを結論とする推論の前提部分を答えるものであり、推論全体を答えとするものではない。

「なぜ」の問いの健全性

「なぜ」の問いの意味もまた、問答推論関係で示すことができるだろう。ところで、「なぜ」の問いが、問答推論の前提や結論となるためには、それが健全でなければならない。つまり真なる答えが存在しなければならない。ところが、この「なぜ」の問いの答えは命題ではなく推論である。では推論が真なる説明であるとはどういうことだろうか。推論形式の説明が真であるためには、まずその推論が妥当でなければならない。つまり、前提が成り立つならば、結論も成り立たなくてはならない。ただし、推論が妥当であるとしても、前提や結論が成り立つとは限らない。しかし、「なぜpなのか？」と問われて、「rであり、sであるので、pである ($r, s \vdash p$)」と答えるのならば、この返答が真なる説明であるためには、推論が妥当であるだけでなく、rとsとpもまた真でなければならない(Pが真であることは、「なぜPなのか？」という問いの前提となっている)。つまり、推論による説明が真であるとは、推論が妥当でありかつ、すべての前提と結論が真であることだと定義できるだろう。

(3) 決定疑問の問答の場合

決定疑問では、ある文pについて、「pですか」と問われる。その答えは、「はい、pです」か「いいえ、pではありません」となる。文pが同一性文でないならば、肯定の答え「はい、pです」は同一性文ではない。しかし、それを同一性文に書き換えることによって、問答によって何が明らかになったのかを、明確にすることができる。

まず確認したいのは、ほとんどの言明は焦点を持ち、決定疑問文もまた焦点を持つということである。焦点とは、言明の中で話し手が注意を向けている箇所である。例えば、「彼女は本を買った」という文の発話の場合、焦点は「彼女」、「本」、あるいは「買った」のいずれかにあるだろう。これを決定疑問発話にした場合も同様に、焦点の位置は、3つの可能性をもつ。焦点の地位を $[\dots]_F$ で表記すると次のようになる(日本語の場合、「は」と「が」が焦点の位置に応じて変化する)。

「 $[彼女が]_F$ 、本を、買ったのですか？」

「彼女は、 $[本を]_F$ 、買ったのですか？」

「彼女は、本を、 $[買った]_F$ のですか？」

これに対する「はい」の答えの完全文の言明も3通りの焦点を持つ。

「はい、 $[彼女が]_F$ 、本を、買いました」

² 拙論(入江幸男 2004)では、「なぜ」の問いを、このように「原因は何か?」「理由はなにか?」「根拠は何か?」という三種類の「何」の問いで言い換えられると論じたが、現在は「なぜ」の問いの答えは、文ではなく推論になると考えている。

「はい、彼女は、[本を]_F、買いました」

「はい、彼女は、本を、[買いました]_F」

これらの「はい」の答えの完全文の言明の焦点の位置を、次のような同一性文に書き換えることによって、明確にできるだろう。

「本を買った人＝彼女」

「彼女が買ったもの＝本」

「彼女が本について行ったこと＝買うこと」

このような同一性文の言明によって、「彼女が本を買ったのですか」「はい、彼女が本を買いました」という問答によって、新情報として何を確認したのかが、明確になる。したがって、決定疑問に対する答えもまた、同一性文に書き換えることができる。

否定の返答の場合にはどうなるのだろうか。

「[彼女が]_F、本を、買ったのですか？」

これに対して、「いいえ」とだけ返答する場合には、「いいえ」に焦点があるだろう。しかし、「いいえ」だけなら、決定疑問文の焦点が異なる場合の、答え「いいえ」の違いを示すことできない。それゆえに、「いいえ」は、次のような返答の完全文の省略形だとみなすのがよいだろう。

「[いいえ]_F、[彼女が]_F、本を買ったのでは[ありません]_F」

焦点の位置は、「いいえ」、と「ありません」だけでなく、「彼女が」にも焦点があると考えたい。なぜなら、もし「彼女が」も焦点を持たないとするならば、上記の 3 つの問いに対する否定の返答は、すべて「いいえ」と「ありません」だけに焦点を持つことになり、次の返答の区別がつかないことになるからである。

「彼女≠本を買った人」

「彼女が買ったもの≠本」

「彼女が本にしたこと≠買ったこと」

3 焦点の変化は命題内容を変えないのか

ここでは、焦点位置の異なる発話は、同じ「意味」であると考えるフレーゲの立場を確認する。上に見たように、ほんどの文は、焦点が置かれた表現を取り出して、それが名詞ないし名詞句でなければ、名詞ないし名詞句に変形して、それを左辺ないし右辺とし、文の残りの部分を、同じ指示対象をもつ名詞句に書き換えることによって、同一性文をつくることができる。このようにして作られる同一性文は、元の発話の焦点位置が異なる場合には、異なる文になる。例えば、「彼女は、本を、買いました」は、次の 3 通りの焦点を持つ。

「彼女が」_F、本を、買いました」
「彼女は、[本を]」_F、買いました」
「彼女は、本を、[買いました]」_F

これらをそれぞれ次の同一性文に書き換えることができる。

「本を買った人＝彼女」
「彼女が買ったもの＝本」
「彼女が本について行ったこと＝買うこと」

これらの同一性文は、元の文と同値であるので、元の文への書き換えを介して、真理条件を同一に保ったまま、互いに別の同一性文に書き換えることができるということである。また元の文への書き換えを介さなくても、同一性文もまた文であるので、その一部を名詞化して、左辺とし、文の残りの部分を同じ指示対象をもつ異なる意味の名詞句に書き換えることによって、異なる同一性文をつくることができる。これらの同一性文は、相互に導出可能であり、同値であり、真理条件が同じである。したがって、もし真理条件が発話の意味であるとする、焦点の違いは発話の意味の違いではない。

フレーゲならば、このような焦点の違いは意味の違いではないというだろう。フレーゲによれば、能動と受動の違いは、文の意味（Sinn）の違いではない。これらは、真理値も意味も同じであるという。例えば、「aがbを殴った」と「bがaに殴られた」の場合には、これらの意味を理解したならば、だれでもその真理値が同じになることを理解できる。そしてこのようなものは意味も同じであるという。³ これに対して、「ヘスペラスはフォスフォラスである」と「ヘスペラスはヘスペラスである」は、同じ真理値を持つが、意味は異なるという。なぜだろうか。その理由は、「ヘスペラスはフォスフォラスである」と「ヘスペラスはヘスペラスである」が同じ真理値を持つことは、誰でも常にわかるとは限らないからということであるようだ。

「言語は、時には思想のこの部分を、時にはあの部分を主語として出現させる手段を持つ。最もよく知られたものの一つは、能動態と受動態の区別である。それ故同一の思想が、ある一つの分析によれば単称的[思想]として、別の分析によれば特称的、第三の分析によれば全称的[思想]として現れることも不可能ではない。したがって、同一の命題が、概念についての言明としても、また対象についての言明としても把握されうるということも、驚くには当たらない。」

（論文「概念と対象について」 Frege 1892a, 訳 p.58）

³ 「aがbを殴った」と「bがaに殴られた」の場合には、これらの意味を理解したならば、その真理値が同じになることを理解できるが、「xがヘスペラスである」と「xはフォスフォラスである」の場合には、これらの意味を理解しても、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」の指示対象が同一であることを知らなければ、真理値が同じになることを理解できない。

推論主義意味論によれば、この二つの意味の違いは、推論によって示されるはずである。

能動態と受動態が、「同一の思想」をもつと同様に、焦点の異なる発話や、それらを同一性言明に変形したものも、「同一の思想」をもつことになるだろう。

ところで、ある文の能動態と受動態の真理値が同じであることを、だれでも知っているとすれば、それは何故だろうか。能動態と受動態の真理値が同じになるのは、それに含まれている語彙の意味によるのではなくて、能動態と受動態の違いによる。もしそうだとすれば、能動態を受動態に変形する推論、逆方向に変形する推論、これらは、表現の意味を変えない、ということである。能動態を受動態に変形する規則を、「受動態導入規則」とよび、受動態を能動態に変形規則を「受動態除去規則」と呼ぶことにすると、この規則は、「保存拡大」という条件を満たすだろう。つまり、受動態導入規則と受動態除去規則を続けて適用した後に、それらの規則なしではできなかつた推論が可能になっているということはない。これと同様に、焦点の異なる発話を同一性言明に変換するときの推論、同じ文の異なる焦点の発話を、同一性言明に変換したときの二つの同一性言明の間の同値推論、これらもまた「保存拡大」という条件を満たし、表現の意味の解明に利用できるだろう。

このように焦点が変化しても、文の真理条件も、適切な推論関係も変わらない。しかし、焦点が異なるとき、その現実の上流推論と下流推論は異なる。まず上流推論が異なることを示そう。

4 焦点の異なる発話を証明する推論は異なる

ここでは、焦点の異なる発話を証明する現実の上流推論は、異なるものになることを確認したい。例えば「彼は、憲法9条を変えたい」という文は、3つの焦点位置を取りうる。

「[彼は]_Fは憲法9条を変えたい」

「彼は[憲法9条を]_F変えたい」

「彼は憲法9条を[変えたい]_F」

この発話の説明を求める「なぜ」の問いもまた次の3つの焦点の区別を持つだろう。(ただし、補足疑問の主たる焦点は疑問詞にあり、「なぜ」の問いの場合には、「なぜ」に主たる焦点があるだろう。ただし第二の焦点は、元の発話と同じく、3つの可能性を持つ。)

「なぜ、[彼は]_Fは憲法9条を変えたいのですか？」

「なぜ、彼は[憲法9条を]_F変えたいのですか？」

「なぜ、彼は憲法9条を[変えたい]_Fのですか？」

これらの発話の答えは、異なるものになるだろう。例えば、次のようになる。

「タカ派が彼の支持母体なので、[彼は]_Fは憲法9条を変えたいのです」

「憲法9条と自衛隊の存在は矛盾するので、彼は[憲法9条を]_F変えたいのです」

「今なら憲法改正の可能性があるので、彼は憲法9条を[変えたい]_Fのです」

これらの答えは、説明されるべき発話を結論とする推論になっている。つまりこれは説明されるべき発話の上流推論である。「なぜ P なのか？」の答えは、P の上流推論である。そして、この例に示されるように、説明されるべき発話の焦点が異なるならば、その上流推論は異なる。

従って、発話の意味の理解が、＜命題の意味の理解＋現実の上流推論の理解＞であるのならば、焦点が異なるとき、命題の意味は同じでも、発話の意味は異なる。このように発話の焦点が異なるとき、その現実の上流推論は異なる。

5 焦点の違いから、現実の下流推論の違いが帰結する

次に焦点の異なる発話は、その下流推論もまた異なることを、会話の含みとの関係で説明しよう。同じ命題の主張が命題の真理性にコミットする点では同じであるにもかかわらず、異なる焦点位置にコミットするとき、主張は、真理性に加えて何にコミットしているのだろうか。

同一文の発話でも焦点が異なる時、何が違うのかと言えば、上に見たように、相関質問が違うのである。では、どうして相関質問が異なるのか、その相関質問はどのようにして決まるのかと言えば、より上位の相関質問によって決まるのである。ある発話 p の相関質問が異なるとすれば、それはそれぞれの相関質問のより上位の問いが異なるからである。＜Q 2→Q 1→A 1→A 2＞という二重問答関係がある時、発話 A 1 の焦点位置を決定するのは、相関質問である Q1 である。Q1 を設定したのは、Q2 を解決するためであった。したがって、A1 の焦点位置は、Q2 に答えようとして Q1 を立てたものが、注目している点なのである。したがって、A1 からの推論で A2 にいたるとき、A1 の焦点位置は、重要な働きをする。このような二重問答関係が、発話 A1 がある箇所に焦点を持つとはどういうことかを説明するものである。発話の焦点位置は、相関質問によって決定するが、そもそもなぜ、ある問いが相関質問として立てられ、答えのある箇所に焦点が当てられて、注目されるのか、ということを理解しようとするれば、そのより上位の相関質問を考え、二重の問答関係の全体を考える必要があるのである。このように考える時、焦点位置は、発話の意味理解にとって中心的なものであり、焦点がことなるとき、「発話の意味」は異なる、と言ってよいだろう。

二重問答関係は、発話の意味を理解だけでなく、次に考察する「会話の含み」を理解する上でも必要なものである。

ミニレポート

課題 1：ある文が異なる問いの答えとなる例を挙げて、その時の焦点が異なることをしめし、その焦点位置を同一性文で表現しなさい。次の例にならって、書いて下さい。

「昨夜は何を食べました？」

文末満返答：「カレー」

①完全文返答：「私は昨夜、[カレー]_Fを食べました」

完全文返答の同一性文：「私が昨夜食べたもの＝カレー」

「あなたがカレーを食べたのは、いつですか」

文末満返答：「昨夜です」

②完全文返答：「私は[昨夜]_F、カレーを食べました」

完全文返答の同一性文:「私が最後にカレーを食べた時＝昨夜」

課題2：同一の文が異なる焦点を持つ例を示し、次にそれぞれについての「なぜ」質問を示し、最後に、それぞれのなぜ質問に対する答えの例を書き、発話の焦点が異なれば、その現実の上流推論が異なることをしめしなさい。

次のように書いて下さい。

「[彼は] Fは憲法9条を変えたい」

「彼は [憲法9条を] F変えたい」

「なぜ、[彼は] Fは憲法9条を変えたいのですか？」

「なぜ、彼は [憲法9条を] F変えたいのですか？」

「タカ派が彼の支持母体なので、[彼は] Fは憲法9条を変えたいのです」

「憲法9条と自衛隊の存在は矛盾するので、彼は [憲法9条を] F変えたいのです」